

特異な「記憶」を伴う霊的変容体験

大門正幸

A Spiritually Transformative Experience with Anomalous “Memories”

OHKADO Masayuki

Abstract

In Spiritually Transformative Experiences (STE), experiencers often obtain information about the meaning and structure of the universe and life as a whole, which is completely different from the worldview they had before the experiences, and the public disclosure of the information can have a significant impact on the worldview of others. This paper discusses the experience of Mr. YOSHIDA Juji as an example of such a case. His experience is thought to have been triggered by the accumulation of years of meditation practices and the death of his eldest son. What is noteworthy about the information he obtained is that (1) he “relived” it, so to speak, not as an observer but as a participant, and (2) the special nature of the information itself.

キーワード：霊的変容体験、靈魂彗星、改訂版人生変化目録

Key words: Spiritually Transformative Experience (STE), soul comet, Life Change Inventory-Revised

1. はじめに

人生観を一変させる霊的変容体験（Spiritually Transformative Experience）¹の中には、体験中に生命を含む宇宙の仕組みやその意味について、それまで本人が有していた世界観とは全く異なる情報が開示され、それが公にされることによって他者の人生観にも大きな影響を与える場合がある。本稿ではそのような例として、吉田壽治氏の体験を取り上げる。氏の体験は長年の瞑想経験の積み重ね及び長男の死によって誘発されたと考えられる。氏が得た情報について特筆すべき点は、(1) 氏が傍観者としてではなく、当事者としていわば「追体験」したこと、そして (2) 情報自体の特異性にある。

2. 調査に至った経緯

筆者は、吉田氏の著書（吉田, 2010）には 2015 年から親しんでいたが、2023 年 9 月に吉田氏の長女の中西泰子氏と連絡を取るようになったのをきっかけに、2023 年 9 月 30 日に zoom で、2024 年 12 月 1 日に直接面談を行なった。以下の記述は、基本的には氏の著書に基づくが面談を通して内容を確認したものである。また、4 節のデータは氏に回答してもらった結果であり氏の著書には記載されていない。

3. 吉田壽治氏とその体験

3.1 吉田氏について

1939年に大阪府で生まれた吉田氏は、同地でオーダーメイドスーツ専門店の営んでいる。10代の終わりごろ「天風会」²に入会し、中村天風氏から直接指導を受けた。会からは5年ほどで離れたが、その後も会で学んだ腹式呼吸と瞑想は継続していた。吉田氏の実践方法は、「就寝前に一日の出来事を振り返って分析し、反省すべき点は反省し、良い点は繰り返すことのできるように念じて、明日の計画を練」り、「その後、静かに腹式呼吸をして呼吸を整え、瞑想」するというもので、所要時間は15分程度であった。(吉田, 2021, p. 42)

3.2 地獄体験・極楽体験

1970年12月、いつも通り15分ほどの呼吸・瞑想実践の後眠りについた吉田氏は、深夜に突然、地獄を思わせるような光景を見、その後、しばらくして、極楽とでも言うべき光景を見た。この二つの体験について、吉田氏は次のように記している。

〔地獄のような体験〕黄色い土砂や赤茶けた土が真横に飛び交い、地面は大きくえぐれていました。開発用の重機は、赤茶けて横転し、燃料を入れていたであろうドラム缶は、ゴロゴロと地面をたたきつけながら転がっていきます。全てのものを拒否し、葬り去るような光景でした。

寝て夢を見ているといった感じは全くありませんでした。リアルに私は、切迫した状態の立場に立たされていたのでした。

なぜか人間は他に誰一人存在せず、私は河原に一人、雲が膝まで一面を覆う中で、ある程度の大きさの石を足場として立っているような感覚でした。しかし、それは非常に不安定で、体を少しでも動かそうとすると石がグラリと動くような状態だったのです。足元すら見ることでできない状態で、よりどころもなく、私は恐怖のあまり全身に力が入って硬くなっていました。天を仰ごうとすれば、不気味な黒い色をした雲が幾重にも層をなして垂れ下がり、体に多い被さらんばかりに湧き出て、地から天にいたるまで覆っているのです。

失意の底にあったとき、私の目の前のそのような空に、針の先で突いたような小さな穴があき、そこから一条の光が差し込んできました。その穴に青い空が一点見えたとき、心がいくぶん和らいだのがわかりました。そして、その一点の青い空を祈る思いで見つめていました。(吉田, 2021, pp. 43-44)

〔極楽のような体験〕私は空中を漂うように浮かんでいて、下の様子を鳥瞰的に眺めていました。小高い山があり、その上には、信仰のシンボルとでもいえるお堂のような建物が建っていました。末の緑が色鮮やかな山には下道が数本あり、土の道は多くの人を通るためなのか粘土層がむき出しになっていて、鮮やかな茶色をしていました。道の脇には、美しい桜が満開に咲き乱れていました。それぞれのコントラストがはっきりして、とても印象深いものでした。

私には、全てを見ることができました。見ているととても心地よく、心がうき

うきしていました。

すると突然、私の足元辺りから巨大な光の塊が渦となって巻き上がったかと思うと、すさまじい勢いでお堂の中へと吸い込まれるように突っ込んでいったのでした。いったい何が起こったのかと思うのと同時に私はその巨大な光の塊の渦に付いて、お堂の中へと瞬間移動していたのでした。

お堂の中には、木枠の窓越しにかすかな光が木漏れ日のように差し込んでいました。そして壁には、十枚ないし十二枚の額が、整然と掲げられていました。入り口から数えて七番目の額に、光の塊の渦は、すさまじい勢いのまま入っていったのでした。(吉田, 2021, pp. 44-45)

3.3 長男の死

これらの体験の直後（おそらく、吉田氏が地獄の光景を見ていたであろう時刻に）、吉田氏は一歳4ヶ月の長男を亡くした。死因は乳幼児突然死症候群（SIDS）であった。失意のどん底に突き落とされた吉田氏にとって、極楽のような光景を見たことは大きな心の支えとなった。

このような体験の9年後、吉田氏はさらに不思議な体験をすることになる。

3.4 靈魂彗星

1979年10月、いつものようにその日の反省をして、次の日の計画を立て、瞑想に入った吉田氏は、いつもとは異なる状態を体験し始めた。この時、吉田氏は40歳であった。以下、吉田氏の著作から引用する。(吉田, 2021, pp. 50-52)

瞑想の状態とは逸脱したことが生じていたのです。そのように感じた瞬間、現実を認識する意識が失われていくようでした。怖いくらいでした。軽く呼吸を試みます。肩の力も抜いていました。まだ、寝たわけではない。このようなことがあってもよいものであろうかと訝る意識がはっきりとありましたが、その思いを払拭した瞬間にぐいぐいと無我の境地に引き込まれていったのです。心は空っぽになったような気がしました。完全に無我の状態に到達したであろうと思われましたが、実際には、それすらも超越していたのです。次の瞬間、想像だにできなかったことが起きたのです。…

第一のチャクラ（脊椎の底部）から、まるでギヤでも入ったかのような小さな刺激と共にエネルギーが生じました。…

そしてそのまま第二のチャクラ（生殖器）でエネルギーは、何乗かに増大したのであります。これはただごとではないと感じていると、そのエネルギーが渦を巻きだしたのです。

なおも直上し、第三のチャクラ（臍）に到達するまでに私は身の危険を感じ、このままでは、命にかかわると判断していました。その間もエネルギーの勢いは乗に乗を重ね弾みがつき、第四のチャクラ（心臓）に到達したときには、すさまじく巨大なものとなっていました。…

〔危険を感じ、周りの様子に注意を払い、いつも通りであることを確認し安堵

した瞬間、] 強烈な勢いで第四のチャクラ（心臓）、第五のチャクラ（喉）、第六のチャクラ（額）と烈々たるエネルギーは渦を巻いて、第七の王冠のチャクラ（頭頂部）に至るまでに急激に成長したのでした。勢いづいたエネルギーの渦は、私の頭上から天空に向かって飛び、光の帯をなしたのです。

ここまでは典型的なクンダリーニ覚醒のようであるが（Woollacott, et al., 2021）、吉田氏の体験が特異なのは、身体を抜け上昇を続けた吉田氏の意識が地球を離れ、吉田氏が「靈魂彗星」と呼ぶ「雲のようなところ」に到達し、そこでのかつての体験を「追体験」したことである。そこは、死後の霊体が次の生を受けるまでに通過しなければならない物体（場所）であり、霊体の輪廻転生を可能たらしめている心臓部に相当する。この靈魂彗星は三十年に一度地球に接近し、地球上で生命を終えた霊体を受け入れ、続いて、新たに地球上に生まれる霊体を地球に送り込む。その過程を終えると、地球を離れ、三十年後に再び地球に戻ってくる。地球上で生命を終えた霊体は靈魂彗星の到来まで地球上で待機することになるが、待機時期の長さは死を迎えた時期と靈魂彗星の到来時期のずれによって決まる。

図1として、吉田（2021, p. 73）より、靈魂彗星の図を引用しておく。

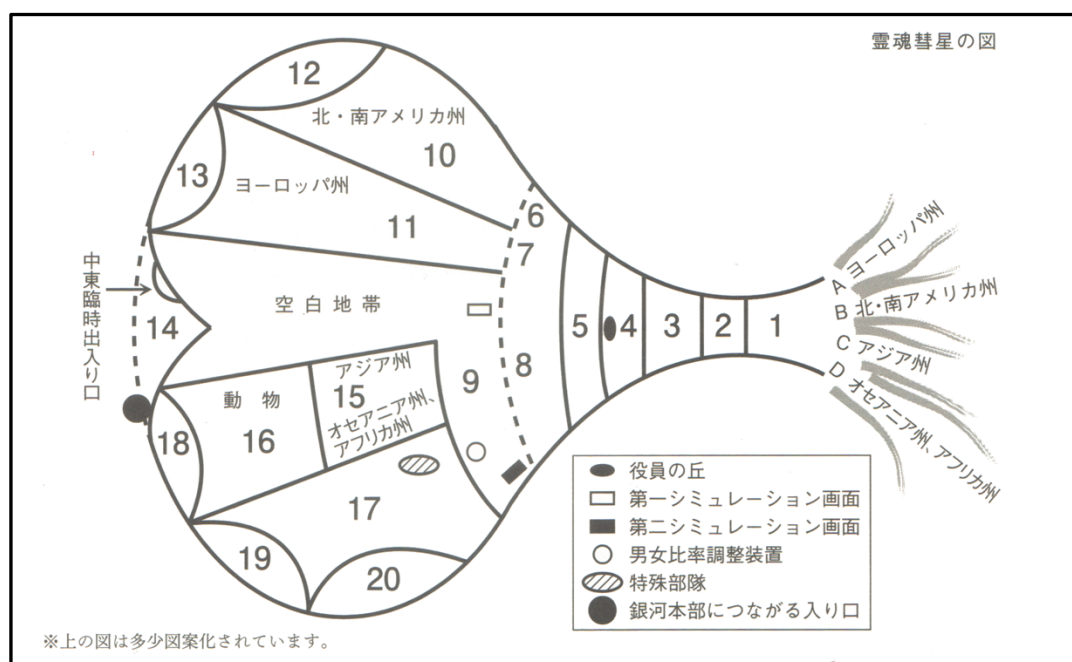


図1 靈魂彗星の図（吉田，2021，p. 73）より

世界各地から集まった霊体は、図1のA、B、C、Dの各方面から1の位置入星し、12、13、14、19、20の位置から地球上の各方面に降り立って行く。12、13はそれぞれ南北アメリカ方面とヨーロッパ方面への出口である。14はエネルギーの小さな生き物の出入りする場所であるが、その上部に中東方面への特別な出入り口がある。19はオセアニアおよびアフリカ方面への出口、20はアジア方面への出口である。

霊体は、互いに助け合う、慈愛の心にあふれた、30人、40人、50人のグループを

形成している。ただし、同じグループに所属していても誕生や臨終の時期は同一ではなく、生誕地もさまざまである。個々の霊体を持つ霊的エネルギーには差があり、ワットで表現すれば、5ワットクラス（全体の55%）、10ワットクラス（全体の30%）、20ワットクラス（全体の13%）、30ワットクラス（全体の2%）の4種類に分かれている。グループが構成される際には個々の霊体のエネルギーが勘案され、どのグループも総体としての霊的エネルギーがおおよそ等しくなるように調整される。また、各グループに一人の割合で、地球上に生まれたときに先天的な障がい者となるものが含まれる。またそれぞれのグループには統括役の長老が存在する。地球上で死を迎えた霊体は、長老およびグループの仲間と共に人生を振り返り、反省したり、自分の在り方を見つめ直して未来への準備をした上で靈魂彗星に戻る³。

図1の1の位置から入星した霊体は地球上での人生についての反省を経ており、人間としての理性、英知、霊知が充溢した状態にある。図1の2の位置には生前の行為を映し出す大型画面が置かれており、生前の行状を見ることができるようになっている。図1の3は生まれ変わる地域を選択する場所である。この時の選択にも、グループの長老は大きく関わる。

図1の4は役員によるチェックを受ける場所である。役員は5人おり、いずれも一際大きな霊的エネルギー（約10億ワット）を持っている。その仕事のひとつが、転生前の霊体の最終チェックである。役員はこの他、靈魂彗星の巡回、成長し過ぎた霊体の再配置、未来をシュミレートし危険を回避する、といった業務に携わる。吉田氏は、この5人の役員の一人であったという。

この後、吉田氏は自分の保有していた巨大なエネルギーを他の存在に渡し、自分のエネルギーレベルを5ワットまで落とし、40歳までの人生をシュミレートし、必要な調整を行った上でこの世に誕生した。その後、この特異な体験をするまでの40年間の人生が走馬灯のように繰り広げられるのを見て、現在の自分に戻った。

この体験により吉田氏は、本人が知り得ないはずの、人間についての深い洞察を得た。

吉田氏によれば、宇宙全体の生命体は、宇宙全体のエネルギーを増大させることが役割であるという。個々の生命体には、それぞれの生物にふさわしい霊的エネルギーが備わっており、それに相応しい個々の課題を自らが選び、その達成を目指して努力することによって、エネルギーの増大が見込める。そのための誕生であり、死であり、再生（生まれ変わり）なのである。つまり、人間は自らが自分の人生（「人生の課題」「親」「生まれる地域」）を選択し、自分の霊的次元について自覚した上で、互いに学び合い助け合いながら、人類全体のために尽力することが大切なのである。

このような観点から見た現在の地球は、靈魂彗星における「未来シュミレーション」で見た危機的な未来に向かいつつある憂慮すべき状態であり、吉田氏は自分の体験を世に伝えることの重要性を強く感じた。とは言え、三人の子ども⁴を抱えた40代の働き盛りの吉田氏にとってはそれを実行に移すのは難しく、家族が寝静まった後に体験を原稿用紙に記すのが精一杯であった。結局、吉田氏が体験を書籍という形で公にしたのは、1979年の体験から31年経った2010年のことであった⁵。タイトルは『私はあの世の「裁判官」だった：[靈魂彗星]初めて明かされる魂の発信基地』、徳

間書店の「5次元文庫」の一冊としての出版であった。この書籍はその新版が2021年にヒカルランドから出版された。本稿が参考にしたのはこの2021年版である。

3.5 体験の性質

吉田氏の体験は、以下の引用が示すように、体験前の世界観を一変させるような体験という意味で霊的変容体験であることは明白であろう。

私は、あまりにもリアルな体験内容であったにもかかわらず、現在に至る自分の人生の実態とは大きく掛け離れたものであったため、できることなら体験そのものを否定して波風の立たぬ人生を歩もうと望んでいました。それゆえ懸命に否定し続けました。

それまでの私は、これといって信仰するものもなく、どちらかといえば目に見えない神がかり的なもの、いわゆる非科学的なものに対して、何の根拠も持たずして拒否反応さえ示していました。私の人生は、何かにつけて恵まれているということはありませんでしたが、努力すればいつの日かと自らを励まし、自分の力のみを信じるものでありました。いわゆる個人主義的な自我で覆い尽くされていたのです。

ところが、体験したことにより、その意識が根底から覆されたのです。私の体験が断片的なものであれば、完全に自分の中で抹殺していたのですが、その体験は違いました。夢や妄想や作り話ではないのです。(吉田, 2021, p. 13)

自身の体験を称するふさわしい言葉を探していた吉田氏が思いついたのは「宇宙意識」であった。その後、リチャード・モーリス・バックが挙げる次の定義に接した吉田氏は、自分の体験が宇宙意識体験と言えるものであることを確信した。(吉田, 2021, pp. 14-15)

宇宙意識とは、普通の人間が持っている意識を超えた、より高次の意識形態のことです。

宇宙意識は、第三の意識形態です。これは、自己意識が単純意識の上方に位置するのと同様に、自己意識の遥か上方に位置します。

宇宙意識の主な特徴は、その名前が示す通り、宇宙、つまり、森羅万象の生命と秩序に関する意識です。

宇宙意識を持つことによって、それだけでその人を存在の新たな領域へ連れて行き、ほとんど新しい種の一員にしてしまうような知的な光明あるいは啓示が起ります。(バック／尾木訳, 2004, quoted in 吉田, 2021, pp. 14-15)

ここで引用されているバック(2004)は、神秘体験研究の嚆矢となった Bucke (1901)の訳であり、そこでは『旧約聖書』のモーゼやブッダ、イエス、ムハンマドといった宗教者や、Bucke と同時代人の Walt Whitman や Edward Carpenter らを含む43名の体験が分析されている。Bucke はその体験が持つ特徴の一つに intellectual

illumination（知的な目覚め）を挙げているが（Bucke, 1901, p. 73）⁶、これは、神秘体験（宗教的経験）研究の古典となった *Varieties of Religious Experience* において、William James が神秘体験の特徴のひとつとして挙げた Noetic Quality（認識的性質）に相当するものであり（James, 1902, pp. 380-381）⁷、現代の意識研究の視点も視野に入れて神秘体験を詳細に論じた Paul Marshall がその特徴の一つとして挙げる knowledge（知識）に相当するものであろう（Marshall, 2005, pp. 65-67）⁸。

これらの宇宙意識的体験／神秘体験によって得られる知識は多岐に渡るが、本稿との関係で重要なのは、世界の起源や仕組みに関する知識である。これには、Jacob Boehme や George Fox が得たような宗教的枠組みによる知識もあれば（James, 1902, pp. 410-411, note 2）、Andrew Jackson Davis（1847）や Martin Israel（1976）のように宗教的枠組みを超えたものまで様々である⁹。

さらに、神秘体験研究において通常は言及されないが類似の例として、「睡眠でも覚醒でも法悦でもない状態における幻視」によって霊界を探訪した Emanuel Swedenborg の体験や（高橋, 2021）、臨死体験中にこの世の成り立ちや未来のビジョンなどを見た木内鶴彦氏の例や（木内, 2015）、自らが発明した Hemi-Sync という音響技術を通して「死後の世界」を探索し、生まれ変わりの仕組みに関する知識を得た Robert Monroe や Bruce Moen の体験を挙げることができる。（Monroe, 1994; Moen, 2005）

しかしながら、吉田氏の体験が特異なのは、単なる観察者としてビジョンを見たり、知識を受け取ったのではなく、生まれ変わりのシステムを統括する役員の一人、すなわち、地球人の目から見れば一種の宇宙人としての活動を当事者として「追体験」した点である¹⁰。この点では、過去生退行催眠（いわゆる前世療法）でクライアントが想起した過去生における人物の体験を「当事者」として体験する場合に似ていると言えるであろう¹¹。

4 Life Changes Inventory-Revised による体験の分析

多様な霊的変容体験について、体験の内容自体を同一の基準によって分析することは困難であるが、体験によって生じた人生観や生き方の変化に焦点を当てれば、共通の尺度で分析することは可能である。そのような尺度の一つとして Kenneth Ring と Bruce Greyson が開発した改訂版人生変化目録（Life Changes Inventory-Revised）がある（Greyson and Ring, 2004）。これは表 1 に示した 50 の項目に対して、Strongly Increased（とても強くなった／とても増加した）、Increased（強くなった／増加した）、No Change（変化なし）、Decreased（弱くなった／減少した）、Strongly Decreased（とても弱くなった／大きく減少した）の 5 段階で回答するものである。臨死体験後の変化を測る尺度として開発された。

この目録は子どもが語った中間生記憶による親の体験（大門, 2018）、サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路での体験（Brumec, 2022）、死後交信体験（大門, 2021）、神秘体験（Schneeberger, 2010）、退行催眠時の「死」の体験（Ohkado and Greyson, 2018）など多様な霊的変容体験の分析に用いられてきた。

表1. Life Changes Inventory-Revisedの各項目

1. 他人を助けたいと思う気持ちは
2. 他人への共感の気持ちは
3. 「日常的なこと」に感謝する気持ちは
4. じっくりと他人の言うことに耳を傾ける力は
5. 自分が尊い存在だと思ふ気持ち（自尊感情）は
6. サイキックな現象（超常的な現象）に関する興味は
7. 組織化された宗教に関する興味は
8. 人生のあらゆる側面に対する畏敬の気持ちは
9. 物質的な物に対する興味は
10. 他人に対する寛容の気持ち（他人を受け入れる気持ち）は
11. 他人の苦しみに対する敏感さは
12. 他人に「よい印象」を与えようとする気持ちは
13. スピリチュアルなこと（霊的なこと）に関する興味は
14. より高次の意識状態に達したいという気持ちは
15. 愛情を明確に（オープンに）表現する力は
16. 他人が抱えている問題を見抜く力は
17. 自然をありがたく思う気持ちは
18. 他人と競争しようとする気持ちは
19. 宗教的な気持ち（特定の宗教と結びついた気持ち）は
20. スピリチュアルな（宗教とは結びつかない霊的な）気持ちは
21. 地球環境に関する関心は
22. 人生とは何かについて理解した、という気持ちは
23. 人生における目的の意識は（自分の人生の目的は何かという意識は）
24. 高次の力の存在を信じる気持ちは
25. 他人を理解する力は
26. 人生の神聖な部分に対する感受性は
27. 生活水準を高くしたいという気持ちは
28. 自分を受け入れる気持ちは
29. 一人でいたい気持ちは
30. 自分の人生には何らかの意味が隠されているという気持ちは
31. 家族と関わる度合いは
32. 死への恐怖は（*逆転項目）
33. 核兵器に対して心配する気持ちは
34. 有名人になりたいという気持ちは
35. 祈る傾向は（祈る回数は増えた／減った？）
36. 「生まれ変わり」を受け入れる気持ちは
37. 他人への共感の気持ちは
38. 環境・生態系への関心は
39. 教会あるいは類似の宗教共同体との関わりは

40. 自分を理解したいという気持ちは
 41. 内なる神が存在する、という感覚は
 42. 傷つきやすさの感覚は（傷つきやすさは）
 43. 死後も生命は続く、という感覚は
 44. 他人が自分をどのように思うか気にする気持ちは
 45. 政治的な事項（政治・政府・市民）に対する関心は
 46. 人生で物質的な成功をおさめたい、という気持ちは
 47. 他人を受け入れる気持ちは
 48. 個人的な意味の探究は（個人的な意味を探究しようと行動することは）
 49. 社会正義の問題に関する関心は
 50. 死や死にゆくことに関係する事項に対する関心は
-

各設問の回答の「とても強くなった／とても増加した」には「2点」が、「強くなった／増加した」には「1点」が、「変化なし」には「0点」が与えられる。一方、「とてもよくなった／大きく減少した」には「-2点」が、「弱くなった／減少した」には「-1点」が与えられる。項目32は逆転項目であり、「とても強くなった／とても増加した」と「強くなった／増加した」にはそれぞれ「-2点」と「-1点」が、「とても弱くなった／減少した」と「弱くなった／減少した」にはそれぞれ「2点」と「1点」が与えられる。尺度の分析は大きく二つの方法で行われる。一つは、絶対値のみを考慮することで体験の全体的な影響を計算する方法で、数値は「0」から「2」の間に収まる。もう一つは、項目または領域内における変化を測るものである。項目6、29、31、36、42については、それぞれが独立しており、「2」から「-2」の5段階で評価される。残りの項目は以下の9つの領域に分けられ、各項目の平均値（「-2」から「2」の5段階）で評価される：「命への感謝

（Appreciation for Life）」（項目3、8、17、26の平均）；「自己受容（Self-Acceptance）」（項目5、28、40の平均）；「他者への気遣い（Concern for Others）」（項目1、2、4、10、11、15、16、25、37、47の平均）、「世俗的成功への関心（Concern with Worldly Achievement）」（項目9、12、18、27、34、44、46の平均）、「社会的に／地上で価値あるとされるものへの関心（Concern with Social/Planetary Values）」（21、33、38、45、49の平均）；「（生きる）意味／目的の探究（Quest for Meaning/Sense of Purposes）」（項目22、23、30、48の平均）；「霊性（Spirituality）」（項目13、14、20、24、41の平均）；「宗教性（Religiousness）」（項目7、19、35、39の平均）；「死を受け入れる気持ち（Appreciation of Death）」（項目32（逆転項目）、43、50の平均）。

吉田氏の回答に関する数値を表2に記す。ただし、領域として分類されておらず、またいずれの研究においても数値の記載されていない、項目6、29、31、36、42については割愛してある。なお、表2では、比較的吉田氏の体験に近いと考えられる臨死体験（Goza et al., 2014）、退行催眠時における「死」の体験（Ohkado and Greyson, 2018）、神秘体験（Schneeberger, 2010）における数値も記載した。

表2. Life Changes Inventory-Revisedの集計結果

価値群	本調査	Goza et al. (2014)	Ohkado and Greyson (2018)	Schneeberger (2010)
合計	1.02	1.07 (± 0.36)	1.13 (± 0.55)	NA
命への感謝	1.25	0.77 (± 1.00)	1.15 (± 0.76)	1.28 (± 0.38)
自己受容	1.3	0.50 (± 0.79)	1.33 (± 0.69)	1.14 (± 0.63)
他者への気遣い	0.3	0.43 (± 0.86)	1.15 (± 0.70)	1.22 (± 0.53)
世俗的成功への関心	0.4	-0.25 (± 0.57)	-0.36 (± 0.86)	-0.48 (± 0.53)
社会的に／地上で価値 あるとされるものへの 関心	1.0	NA	0.38 (± 0.68)	0.81 (± 0.67)
(生きる) 意味／目的 の探究	1.5	0.57 (± 0.91)	1.26 (± 0.69)	1.17 (± 0.63)
霊性 (スピリチュアリ ティ)	2.0	0.73 (± 0.97)	1.14 (± 0.83)	1.16 (± 0.70)
宗教性	0.8	0.40 (± 1.20)	-0.48 (± 0.98)	0.01 (± 0.92)
死を受け入れる気持ち	2.0	NA	1.12 (± 0.65)	NA

合計の得点は「1 (強くなった／増加した)」を若干上回っており、当該の体験が吉田氏に強い影響を与えたことを示している。「命への感謝」や「自己受容」、「(生きる) 意味／目的の探究」、「霊性 (スピリチュアリティ)」、「死を受け入れる気持ち」の数値の強化／増加は他の体験と同傾向を示しているが、「社会的に／地上で価値あるとされるものへの関心」の「強化／増加」は意外に見えるかも知れない。しかしながら、次の引用に示すように、体験の内容を人に伝えなければいけない、という強い思いがこの項目の強化／増加につながったのではないかと考えられる。

その日 [特異な体験をした日] から、私の否定しようとする思いとは反対に、心の中では体験したことが知識として確信になっていったのでした。今までの人生からは考えも及ばないような体験—しかし、やはり自分は普通の人間であるという思いがよぎり葛藤が生じました。そして、3年間は黙して語りませんでした。その間も体験にかかわると思われる事柄に知らず知らずのうちに注目し、情報収集している自分がいきました。ニュース等であまりにも醜い人類の様に接することが度重なると、このままでは人類は間違った方へ向かってしまうのでないか、体験内容を人々に伝えなければならない、という自分の中からあふれ出る思いを抑えることはできませんでした。

(吉田, 2021, pp. 13-14)

このように、吉田氏の体験は、全体的に見れば他の霊的変容体験と同種の体験だと言えるが、体験を通して得られた知見を世間に伝えなければならないという切迫した思いを伴

っていることは、体験で得られた知見の内容、及びその知見を当事者として「追体験した」ことによるものであろう。

5 結語

意識（いわゆる魂）は肉体を超えて存在し続け、成長を志向して生まれ変わりを繰り返す、という中核の部分においては吉田氏の得た知見はいわゆるスピリチュアルな文献において繰り返されてきた主張と共通している。この先行文献でなされてきた主張を、特に科学的な研究の成果に焦点を当ててまとめたものとして、飯田史彦氏による「生きがい論」¹²がある。この「生きがい論」はその内容を知ることによって「生きがい感」が向上することが示されており（飯田, 2004; 大石・濁川・安川, 2008; 大門, 2013）、その意味で、吉田氏の得た知見についても、それを知ることによるポジティブな心理的影響が期待できる。しかし、吉田氏の得た知見は、これまで言われてきた主張と比して遥かに詳しく具体的である。吉田氏の提供する情報に接した者にとって、その詳細かつ具体的な内容が中核部分を補強する方向に働くか、あるいは逆に働くかは受け取り手の持つ世界観に大きく依存するであろうが、命の意味や仕組みに関心を持つ者にとって吉田氏の語る内容が非常に重要な知見の一つであることは間違いないであろう¹³。

注

1. 霊的変容体験全般については、American Center for the Integration of Spiritually Transformative Experience (ACISTE) の web ページを参照。
2. 天風会については天風会の公式サイトを参照：<https://www.tempukai.or.jp/> また、中村天風氏の教えについては氏の代表作の中村（1994）を参照のこと。
3. この部分は、臨死体験の構成要素の一つとして挙げられている「人生回顧（life review）」を思わせる。臨死体験全般については、第一人者による最新の著述ということで Greyson (2021) を、臨死体験における人生回顧に関する考察については Ring and Valarino (2000) を参照されたい。
4. 吉田氏には夭折した長男の他に三人の娘がいる。
5. 出版にあたっては、吉田氏の原稿を整理、推敲し、出版社との交渉にあたった長女中西泰子氏によるところが大きい。中西氏は父親である吉田氏の体験を理解するため大学で哲学を専攻し、James (1902) の「回心 (conversion)」について卒業論文を執筆している。
6. その他の特徴として、the subjective light、moral elevation、sense of immortality、loss of fear of death、loss of sense of sin、suddenness が挙げられている。
7. その他の特徴として、ineffability、transiency、passivity が挙げられている。
8. Marshall (2005, pp. 59-81) は、その他の特徴として、unity、self、love、vision、sound、time、life、presences and realities、body、paranormal phenomena、fusion of characteristics、positive/negative tone を挙げている。なお、Marshall (2005) は、Stace (1961) の 2 分類に従い、introvertive mystical experience を除外し、extrovertive mystical experience のみを考察の対象としている。この 2 分法に従えば、吉田氏の体験は extrovertive

mystical experience である。

9. Martin Israel は英国教会の司祭であるが、著書では、キリスト教の教義には含まれない「生まれ変わり」による生物の進化に言及している。
10. 理論物理学者の保江邦夫氏は「かつてシリウス連星系の艦隊司令官だった」ことを公言している。しかし、筆者の知る限りでは、霊能のある巫女に告げられた内容であり、吉田氏のような「追体験」をしたわけではない。(保江, 2024)
11. 過去生退行催眠については、ワイス (1991) などを参照。
12. 飯田 (2012) 参照。飯田氏の「生きがい論」は次の 5 つの仮説からなる。(i)「死後生仮説」：人間は、トランスパーソナルな存在であり、その意味で、人間の生命は永遠である；(ii)「生まれ変わり仮説」：人間の本質は、肉体に宿っている意識体(魂)であり、修行の場(学校)である物質世界を訪れては、生と死を繰り返しながら成長している；(iii)「ライフレッスン仮説」：人生とは、死・病気・人間関係などの様々な試練や経験を通じて学び、成長するための学校(修行の場)であり、自分自身で計画した問題集である。したがって、人生で直面するすべての事象には意味や価値があり、すべての体験は、予定通りに順調な学びの過程なのである；(iv)「因果関係仮説」：人生では、「自分が発した感情や言動が、巡り巡って自分に返ってくる」という、因果関係の法則が働いている。この法則を活用して、愛のある創造的な言動を心がければ、自分の未来は、自分の意思と努力によって変えることができる；(v)「ソウルメイト仮説」：人間は、自分に最適な両親(修行環境)を選んで生まれており、夫婦や家族のような身近な人々は、「ソウルメイト」として、過去や未来の数多くの人生でも、立場を交代しながら身近で生きる。この 5 つの仮説では「個々の意識はより大きな意識の一部である」という多くの霊的変容体験において得られる知見が扱えないため、大門 (印刷中) では次の「ワンネス仮説」を付け加えた：万物は根源的な意識から発し互いに繋がりあった存在である。
13. 紙幅の関係で割愛した部分も多い。さらなる詳細については吉田 (2010; 2021) を参照にされたい。

謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです(課題名：「Spiritually Transformative Experience に関する研究」、承認番号：280114)。調査にご協力いただいた吉田壽治氏、中西泰子氏、英文の校閲をしてくださった James Matlcok 氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 飯田史彦 (2004) 『生きがいの教室：人生の意味を問う「生きがい教育」のすすめ』東京：PHP 研究所。
- 飯田史彦 (2012) 『[完全版] 生きがいの創造：スピリチュアルな科学研究から読み解く人生のしくみ』東京：PHP 研究所。
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志 (2008) 「死生観に関する教育による生きがい感の向上——飯田史彦による『生きがい論』の応用事例」『トランスパーソナル心理学／精神

- 医学』8(1), 44-50.
- 大門正幸 (2013) 「PIL テストの結果が示す『生き方学』の効果」『貿易風』8, 80-84.
- 大門正幸 (2018) 「子供が語る胎内記憶によって誘発された霊的変容体験」『人体科学』27(1), 13-22.
- 大門正幸 (2021) 「死後交信と霊的変容体験」『中部大学リベラルアーツ論集』3, 22-32.
- 大門正幸 (印刷中) 「生きがいの教育」. 坂井祐円編『いのちにふれる いのちから教わる』京都：晃洋書房.
- 木内鶴彦 (2015) 『これがあの世飛行士の真骨頂！ 臨死体験 3 回で見た《2 つの未来》この世ゲームの楽しみ方と乗り越え方！』東京：ヒカルランド.
- 高橋和夫 (2021) 『スウェーデンボルグ：科学から神秘世界へ』東京：講談社.
- 中村天風 (1994) 『運命を拓く』東京：講談社.
- バック、リチャード・モーリス／尾木憲昭訳 (2014) 『宇宙意識』東京：ナチュラルスピリット (Bucke, 1901 の訳) .
- 保江邦夫 (2024) 『僕が UFO に愛される理由』東京：青林堂.
- 吉田壽治 (2021) 『私はあの世の『裁判官』だった：[靈魂彗星] 初めて明かされる魂の発信基地』東京：ヒカルランド.
- 吉田壽治 (2010) 『私はあの世の『裁判官』だった：[靈魂彗星] 初めて明かされる魂の発信基地』(5 次元文庫) 東京：徳間書店.
- ワイズ、ブライアン／山川鉦矢・山川亜希子訳 (1991) 『前世療法：米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』東京：PHP 研究所.
- American Center for the Integration of Spiritually Transformative Experience (ACISTE) (n.d.) <https://aciste.org>. (2024 年 12 月 29 日接続)
- Brumec, S. (2022) “Life Changes After the Camino de Santiago Pilgrimage, Including a Deeper Sense of Spirituality.” *Journal for the Study of Spirituality*, 12(1), 20-35.
- Bucke, R. M. (1901) *Cosmic Consciousness: A Study in the Evolution of the Human Mind*. Secaucus, N.J.: Citadel Press.
- Davis, A. J. (1847) *The Principles of Nature, Her Divine Revelations, and a Voice to Mankind*. Boston: Colby & Rich, Banner.
- Goza, T. H.; Holden, J. M.; Kinsey, L. (2014) “Combat Near-Death Experiences: An Exploratory Study.” *Military Medicine*, 179, 1113-1118, 2014.
- Greyson, B. (2021) *After: A Doctor Explores What Near-Death Experiences Reveal About Life and Beyond*. New York: St Martins Essentials.
- Greyson, B.; Ring, K. (2004) “The Life Changes Inventory-Revised.” *Journal of Near-Death Studies*, 23(1), 41-54.
- Israel, M. (1976) *Precarious Living: The Path to Life*. London: Hodder & Stoughton.
- James, W. (1902) *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature Being the Gifford Lectures on Natural Religion Delivered at Edinburgh in 1901-1902*. London: Longmans, Green, and Co.
- Marshall, P. (2005) *Mystical Encounters with the Natural World: Experiences and Explanations*. Oxford: Oxford University Press.

- Moen, B. (2005) *Afterlife Knowledge Guidebook: A Manual for the Art of Retrieval and Afterlife Exploration*. Newburyport, MA: Hampton Roads Publishing Company.
- Monroe, R. (1994) *Ultimate Journey*. New York: Doubleday.
- Ohkado, M.; Greyson, B. (2018) "A Comparison of Hypnotically-Induced Death Experiences and Near-Death Experiences." *Journal of International Society of Life Information Science*, 36(2), 73-77.
- Ring, K.; Valarino, E. E. (2000) *Lessons from the Light: What We Can Learn from the Near-Death Experience*. New York: Moment Point Press.
- Stace, W. (1961) *Mysticism and Philosophy*. London: Macmillan Press.
- Schneeberger, S. (2010) *Unitive/Mystical Experiences and Life Changes*. Doctoral dissertation, University of Northern Colorado.
- Woollacott, M.; Kason, Y.; Park, R. D. (2020) "Investigation of the Phenomenology, Physiology and Impact of Spiritually Transformative Experiences – Kundalini Awakening." *Explore*, 17(6), 525-534.